Short ショートコメント ★★★

理想郷

2022 年／スペイン・フランス映画
配給：アンプラグド／138 分

2023（令和 5）年 11 月 16 日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２３－１３６

監督：ロドリゴ・ソロゴイェン
脚本：イザベル・ペーニャ／ロドリゴ・ソロゴイェン
出演：ドゥニ・メノーシェ／マリナ・フォイス／ルイス・サエラ／ディエゴ・アニード

みどころ

定年になり、子供が独立し、夫婦二人だけになれば、都会を離れ、田舎で野菜作りをしながら晴耕雨読の日々を。それが理想のライフスタイル！そんな日本人も多いが、本作のフランス人夫妻もそれだ。

しかし、移住先の選択は難しい。本作はスペインで現実に起きた殺人事件を題材として「理想だと思ったその土地は地獄でした」という物語を紡いでいくが、途中で撤退（＝引っ越し）は無理だったの？

“東京国際映画祭 3 冠受賞”の評判作だが、私には、“最悪の隣人”がいた移住先を諦めて引っ越しを決断できない夫婦の“頑固さ”は如何なもの！なぜ、そんなにこの地に固執するの？しかも、夫の殺害を確信しながら、なお、遺体、遺品探しのために、この地にこだわる妻の気持ちは私には理解不能だ。しかして、なぜ、こんな映画が高く評価されたの？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆本作のチラシには、「第 35 回東京国際映画祭 3 冠受賞！東京グランプリ（最優秀作品賞）／最優秀監督賞／最優秀主演男優賞」「大女優カトリーヌ・ドヌーヴも本作を高く評価！」の文字が躍っている。友近のナレーションで放映されている NHK の TV 番組『いいいじゅー！！』は、新しいライフスタイルや生き方を求めて一歩を踏み出した人々に密着するドキュメントとして人気を集めている。これは、きっと定年を迎え、子供も自立した仲の良い夫婦の中には、都会から田舎への“移住”を実現可能性の高い、現実的な夢だと考える人も多いためだろう。本作における、フランス人夫婦アントワーヌ（ドゥニ・メノーシェ）とオルガ（マリナ・フォイス）もそれだ。

彼らは都会を離れて田舎で過ごすスローライフに夢を抱き、スペインの星空が美しい緑豊かな山岳地帯ガリシア地方の小さな村に移住した。二人の望みは、静かで慎ましやかな暮らし。自然に優しい有機栽培で育てた野菜を市場で販売し、村に点在する廃墟を修繕していくことで、過疎化が進む村の活性化に繋がるだろうと考えていたが、さて現実は・・・？

◆スペインは『歌劇カルメン』の印象が強いためか、“太陽と情熱の国”であり、明るく暖かい国というイメージがある。しかし、本作の舞台となるガリシア地方はスペインの北西に位置するため雨が多く穏やかな気候だから、“太陽の国”というイメージとは程遠いらしい。また、あるサイトによると、中央の人間が差別意識を込めてガリシア地方を語る時、ガリシアの人間はしばしば「利己的」「頑固」と形容されるそうだ。知らなかったなぁ。

本作のキャッチコピーは「理想だと思ったその土地は地獄でした」というものだが、本作の主人公となるフランス人夫婦は、移住を決める前に“下調べ”等はしなかったの？ガリシア地方にある、人口数十名という過疎化が進む小さな村への移住を決断するについては、それくらいの慎重さが不可欠だったのでは？

◆本作に見る意地悪な隣人である、シャン（ルイス・サエラ）、ロレンソ（ディエゴ・アニード）兄弟がアントワーヌ夫妻に対して見せる「敵意」と「憎悪」は、隣人同士の「好き嫌い」や「相性」というレベルの問題ではない。まさに“嫌がらせ”の極致だ。それはまた、民法上の不法行為に該当するし、場合によれば刑法上の犯罪にも該当するものだ。

本作は 2 部構成になっているが、その前半では、不気味な効果音の中で対立と抗争がエスカレートしていく姿が映し出されるので、それに注目！その結果、まさかの殺人事件まで・・・？もっとも、普通の「スリラーもの」なら、その過程が興味の対象になるのだが、私にはそんな嫌がらせのオンパレードの中で、なぜアントワーヌがこの移住の地にこだわり続けるのかが理解できないから、本作の展開（脚本）に疑問が・・・。

◆アントワーヌが警察を訪れ、何度も対処を求めたのは当然だ。しかし、その度に警察は、日本流に言えば「善処します」と言うだけ。アントワーヌがそれを納得できないのは当然だが、弁護士の私にはそんな警察の対応は十分理解できる。したがって、私が弁護士としてアントワーヌの相談を聞いた場合の対処法（解決策）は、唯一つ、ここを移住先と決めた自分の夢を諦めて元の都会に戻るか、他の移住先を探すことだ。「民事訴訟を起こしましょう」「警察に告訴しましょう」とアドバイスする若い弁護士もいるはずだが、私に言わせれば、それは争いをエスカレートさせるだけの間違ったアドバイスだ。そう思っていると、案の定・・・。というより、事態はあっと驚く最悪の結果まで進んでいくことに。

◆もとより、学がなく、風力発電所の誘致で金が落ちてくるのを待っているだけの男（?）シャン、ロレンソと違い、アントワーヌはインテリだから、防御策は万全！それは、アントワーヌの考えでは、ビデオカメラで常に彼らの行動を録画しておくことだったが、私に言わせれば、そんな手段も逆に相手を刺激するだけでナンセンス！大柄なアントワーヌを小柄なシャン、ロレンソ兄弟がどうやって襲うのかは興味深いが、本作では、アントワー

ヌが隠し置いたビデオカメラの前でプロレスまがいの“1 対 2 の死闘”が繰り広げられるので、それに注目！しかし、私に言わせれば、これも極めて不自然な設定だ。

◆本作後半の主人公は、妻のオルガになる。“あれから”数年、オルガは今、1 人で野菜を作りながら、この地での暮らしを続けるとともに、“亡き夫”の遺体をはじめとする遺留品探しに執念を燃やし続けていた。しかし、これって一体ナニ？夫の死亡（殺害？）にもかかわらず、なお、妻が 1 人でここに残って生活する意味（意義）は一体どこにあるの？

その無意味さを厳しく指摘し、「今日こそは必ずママを連れて帰るわよ」と詰め寄るのが娘のマリー（マリー・コロン）だが、それに対するオルガの反応は？一見夫に付き従って生きてきただけのオルガに対して、一見自由に思うがままに自分の意思で生きてきた娘の方が、その“意志力”が強そうに思えたが、実は全く逆！この母と娘のトコトン本音の“激論”を聞いていると、オルガの自分の生き方への信念の強さは驚異的だ。

◆共同で脚本を書き、本作を監督したスペインのロドリゴ・ソロゴイェンは 1981 年生まれながら、今日のスペインにおける著名な映画監督の地位を確固たるものにしているそうだ。私が見たのは『おもかげ』（19 年）（『シネマ 48』267 頁）だけだが、その評論で私は「美しい風景の中で展開される物語は、会話劇中心だが、別れた夫や現在の恋人はどんな役割を？私にはそこらの展開がイマイチ不満。さらにラストも、わかったようなわからないような・・・。」と書いた。それに対して、スペインで実際に起きた事件を題材にした本作はそれとは逆に、「理想だと思ったその土地は地獄でした」という物語をスクリーン上に描いていくだけの“ワンイシュー映画”。私はそう思わざるを得ない。

◆私は 2024 年 3 月末で弁護士生活 50 周年を迎えるが、自宅の引っ越しは約 10 回、事務所の移転も 4 回している。その動機は常に「今よりもっといいところを求めて」だが、自分にとって何が「より良いところ」かは、その時々の状況によって違うのは当然だ。「移住」も人が「今よりもっといいところを求める」ための 1 つの方法だが、逆に移住が失敗で「理想だと思ったその土地は地獄でした」と考えれば、すぐに引っ越しをしなければダメだ。

そんな私の価値観によると、アントワーヌ夫婦の選択は全く理解できない。彼はなぜこんなタチの悪い隣人が住む移住先に固執したの？そう考えると、ある意味でアントワーヌの不幸（死亡）は自業自得。そしてまた、オルガが執念を燃やしてアントワーヌの遺品とも言うべき、隠されていたビデオカメラを発見しても、そのことに一体何の意味があるの？

本作では、証拠となるべき SD カードが再生不能となっていたため、シャンとロレンソの刑事事件は立件には至らなかったが、本作にはあっと驚く結末が訪れるので、それに注目！それが本作の秀逸さだとする評論もあるが、私は反対だ。オルガだけが最後にこんな自己満足をして、一体何の意味があるの・・・？　　2023（令和 5）年 11 月 17 日記